

アイコイル実験

渡辺 満（静岡県）

§0 はじめに

一般に、“アイ起電力”を発生させる目的で作られたコイルを、アイコイルと呼んでいる。

（アイ起電力の詳細は → アイコイル超発電.pdf）

最近、フリーエネルギーを説得力あるものにするためには、さらに、永久機関を形成できなければだめだと思い、それを始めた。そのため、まず強力なアイコイルを開発した。

また、このアイコイルを動かすために、自前の発振回路を作った。

以前は、アイコイルを効果的に動かすためには、555などによって、鋭いスイッチングをする必要があると、勝手に思い込んでいたが、今回、必ずしも、そうでないことに気がついた。強い共振を起こすのもよいらしい。

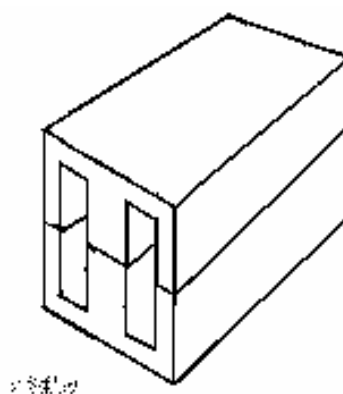
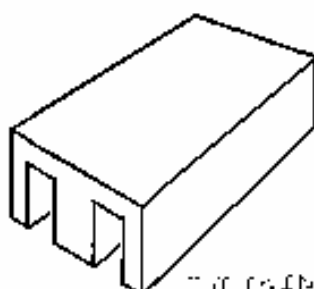
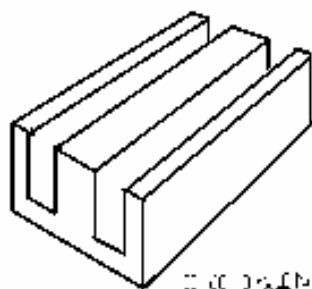
実験模様の動画を YouTube に UP した。

→ “アイコイル実験(Free-Energy)”

§1 アイコイル



EI-60 コア



コイルは、SW コイルとアイコイルの2つからなる。

EI-60 コアの8枚重ねを2段積みにして、内にできるトンネル状の穴に、SW コイル及びアイコイルの巻き線をはめ込む。

下の写真は、その例。



SW コイルは30回巻き、アイコイルは約300回巻き。

アイコイルの巻き線は、次の被覆線

…協和ハーモネット:架橋ポリエチレン電線 KQE 0.5mm
(銅線 0.5mmΦ、外径 1mmΦ)

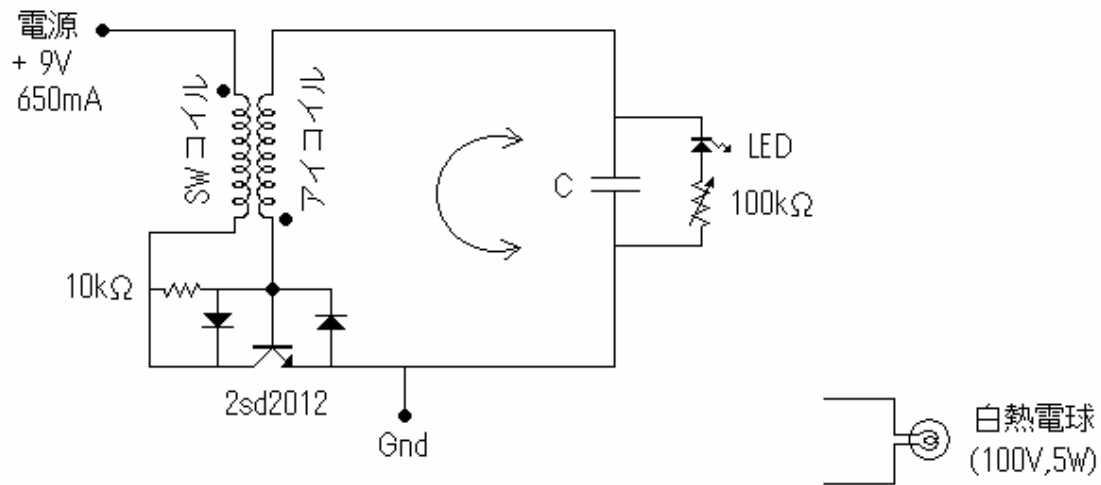
皮膜の薄いポリウレタン線などでは、

アイコイルの巻き線間に発生するアイ起電力によって、絶縁破壊を起こし、短絡するので不適當。

SW コイルは、巻き数が少ないので、皮膜の薄いポリウレタン線などでもよい。



§ 2 回路



このアイコイルを動かすために、上のような発振回路を作った。

電源は、ACアダプター(DC9V,650mA)

右のLC回路に電流が流れると、

トランジスタによって、SWコイルに電源より電流が流れ、

それにより、アイコイルとコンデンサCがLC共振する。

発振の有無は、右に付けたLEDで判断、

可変抵抗器を絞って、小さく光らせる。

左の抵抗10kΩはバイアス用。

多くの場合、電源ONで自動的に発振が始まるが、

発振しない場合は、トランジスタのコレクタから線を引いて、

その先をGndにチョンと付けることで、発振させる。

コンデンサCを色々取り替えて発振させ、

Cの両端の周波数と交流電圧(AC-V)を、マルチメーターで測った。

$C=100\text{pF} \rightarrow 40\text{kHz}$ 、?

$1000\text{pF} \rightarrow 18\text{kHz}$ 、?

$4700\text{pF} \rightarrow 7.5\text{kHz}$ 、140V

$0.1\mu\text{F} \rightarrow 1.3\text{kHz}$ 、95V

$1\mu\text{F} \rightarrow 360\text{Hz}$ 、2V

$10\mu\text{F} \rightarrow 55\text{Hz}$ 、9V

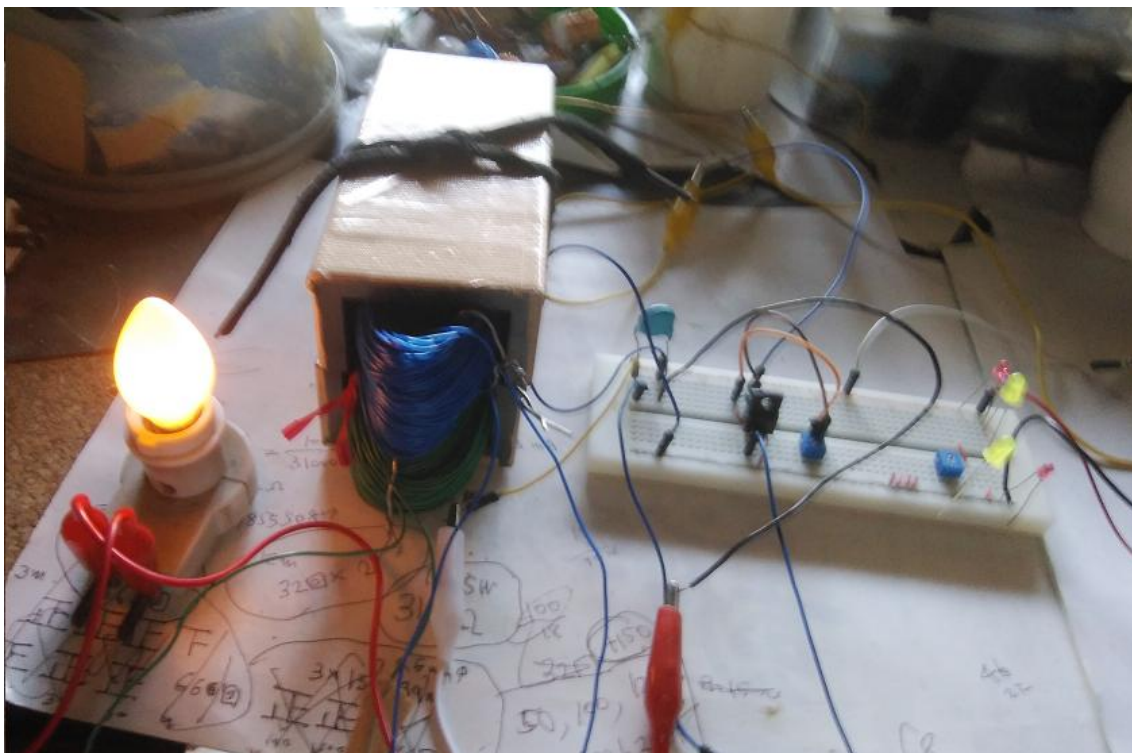
次に、

Cの両端にLEDではなく、白熱電球(100V,5W)を付けて、
発振させた場合は、

$C=1000\text{pF} \rightarrow 430\text{Hz}$ 、52V

であった。

これが、今回の見せ場で、白熱電球はかなり明るい。



§3 アイ起電力

一般に、コイルには、電磁誘導によるもの以外に、僕が、“アイ起電力”と呼んでいるものが発生する。アイ起電力は、電磁ポテンシャルを原因とし、電流を増大させる方向に作用する。アイ起電力を強くするために、特に工夫されたコイルを、アイコイルと呼ぶ。

アイ起電力が、フリーエネルギーを生み出すので、アイコイルの研究が最重要課題である。現時点では、科学はアイ起電力を認識していないだろう。
(アイ起電力の詳細は → アイコイル超発電.pdf)

…参考…

普通のコイルは、コアに巻き線を巻くが、アイコイルでは、逆に、巻き線にコアを巻くといった感じになる。これは、電流に作用する電磁ポテンシャルを、大きくするための工夫である。

ここまで述べたことは、実はそのまま、テスラ・コイルにも当てはまり、テスラ・コイルの謎を解く鍵となる。

2020年7月発行

著者:渡辺 満, 発行者:渡辺 満

Copyright 渡辺 満 2020年